シャトーカミヤの建設経緯と建築的特徴

AN ARCHITECTURAL HISTORY AND CHARACTER OF CHATEAU KAMIYA

中野茂夫*¹, 斎藤英俊*², 中島 伸*³
Shigeo NAKANO, Hidetoshi SAITO and Shin NAKAJIMA

The purpose of this paper is to clarify an architectural history and character of Chateau Kamiya. Chateau Kamiya designed by Okada Tokitaro(1859-1926) was built by Kamiya Denbee(1856-1922) in September 1903. This building was the oldest comprehensive wine distillery in brick in Japan.

In Chateau Kamiya, administration building, wine distillery and wine storage in brick extant. That three buildings stay almost unchanged after the construction. Chateau Kamiya is the only comprehensive wine distillery constructed in the Meiji era. Chateau Kamiya is a precious industrial heritage.

Keywords : Chateau KAMIYA, Ushiku chateau, Kamiya Denbee, Okada Tokitaro, Industrial heritage

シャトーカミヤ、牛久シャトー、神谷伝兵衛、岡田時太郎、産業遺産

1. はじめに

シャトーカミヤ（旧称「牛久醸造場」「牛久シャトー」）の前身は、初代・神谷伝兵衛（1856-1922）が明治34年3月～36年9月に建設した国内最初の本格的な葡萄酒醸造場で、現在も煉瓦造の本館、旧醸造場、旧貯蔵庫等の一連の建築群が現存している。

日本における最初期の葡萄酒醸造とそのための葡萄栽培は、明治政府が殖産興業の一環として設立した播州葡萄園と、開拓使の札幌官園・葡萄酒醸造所における試みであった。しかし、葡萄樹への寄生虫の発生もあり、大きな成功をおさめることなく明治20年代には終焉を迎えている。一方、山梨県祝村（旧勝沼町・現甲州市）では、土着の山葡萄や甲州葡萄を使用して見よう見まねの葡萄酒製造が始められ、官営の醸造所の設置により早くから生産に成功したが、販路が限られていたこともあり、本格的な葡萄酒醸造場が建設されるには至っていない。管見の限りではあるが、シャトーカミヤは明治時代に建てられた本格的な葡萄酒醸造場の唯一の遺構である可能性が高い。

シャトーカミヤの建設経緯については、これまでも著書^{※1)}や市史^{※2)}等において度々記述されてきているが、いずれも大正10年に発行された創始者の伝記である『神谷傳兵衛』^{※3)}に依拠したものといつてよい。この伝記には神谷伝兵衛の足跡や醸造場の建設経緯、葡萄

園内の運営状況等について詳細に記されており、シャトーカミヤについて理解する上でもっとも有用な文献史料といえる。しかし、シャトーカミヤの建築物についてはその種類と建坪が列挙されているのみである。

シャトーカミヤの建築物に関しては、産業遺産としてたびたび紹介されているが、設計図や建築に関わる史料が寡少であることもあって、いずれも概略的な記述に止まっている^{※4)}。一方、シャトーカミヤの設計者である岡田時太郎に関しても、設計にいたる経緯や意図等に関する詳しい資料は見つかっていない^{※5)}。したがってシャトーカミヤの建設当初の建物については、実測調査や古写真等から復元的考察をおこなう必要がある。

以上から、本稿では近代日本の葡萄酒醸造の導入過程を知る上でも貴重な遺構であるシャトーカミヤを対象として取り上げ、その建設経緯と建築的特徴について明らかにすることを目的とする。シャトーカミヤの建設経緯については『神谷傳兵衛』に依拠しつつ、古写真や関連史料等^{※6)}からあらたな知見を付け加えることとし、建築的特徴については実測調査の成果を中心に明らかにする。その上でシャトーカミヤが持つ文化的価値について検討することとする。なお、本稿は平成17-18年度に実施された茨城県近代化遺産（建築物等）総合調査の成果の一部である^{※7)}。

*1 日本学術振興会特別研究員・京都工芸繊維大学
博士（都市・地域計画）

*2 筑波大学大学院人間総合科学研究科世界文化遺産学専攻
教授・工博

*3 東京大学大学院工学研究科 大学院生・修士（環境科学）

Research Fellow of the JSPS, Kyoto Institute of Technology, Ph. D. in Urban and Regional Planning

Prof., Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Univ. Tsukuba., Dr. Eng.

Graduate School, Engineering, Univ. Tokyo., MR.

2. シャトーカミヤの建設経緯

2.1 神谷伝兵衛の略歴と葡萄酒醸造^{※8)} (表1)

神谷伝兵衛は、酒類製造・販売業の他、銀行、石油、汽船、製薬、鉄道など多くの会社を設立・経営した明治・大正時代の事業家である。神谷が葡萄酒と出会ったのは、明治6年、横浜の外国人居留地においてフランス人が経営するフレッシェ商会に採用され、労働者として混成酒醸造場で働いていたときである。その後、神谷は独立して東京・浅草で濁り酒の一杯売屋（国内最初の洋酒バー「神谷バー」〔1912年〕の前身）を構え、酒精輸入販売、酒精製造、葡萄酒再製と事業を展開していった。

当時の日本では葡萄酒の酸味・渋味が好まれず、広く一般に普及するに至っていなかったため、明治14年に神谷は輸入葡萄酒に蜂蜜や漢方薬を加えた甘味葡萄酒の販売をはじめた。「蜂印香蜜葡萄酒」という商標で親しまれた再製葡萄酒は好評を博したが、明治20年代にはいと次第に輸入葡萄酒が出回りをはじめたため、神谷はみずから葡萄酒醸造に取り組むことを決意した。

明治27年、神谷伝兵衛は養嗣子の神谷伝蔵（2代目・神谷伝兵衛）をフランス・ボルドー（デュボア商会のカルボンブラン村醸造場）に派遣した。伝蔵は葡萄樹栽培法、機械の操作、醸造技術に関する知識と技術を習得し、葡萄酒醸造に必要な書籍や醸造用具、土壌サンプルなどを携えて、明治30年1月に帰国した。

神谷伝兵衛は早速、醸造場建設にあたって調査を開始し、葡萄樹に適した土壌、鉄道輸送の便、大規模な土地の入手という点を勘案して、同年10月に茨城県稲敷郡牛久村の女化原の原野120町歩（後に160町歩に拡張）を購入した^{※9)}。そして翌31年3月までに、まず23町歩の土地を開墾してすでにボルドーから取り寄せていた葡萄樹を移植し、神谷葡萄園を創設した（図1）。その一方で仮醸造場を設置し、赤・白ワインの醸造に成功した神谷は、明治34年3月から本格的な醸造場の建設に着手した。それから2年半後の明治36年9月、牛久醸造場は竣工した。以下では、神谷葡萄園と牛久醸造場にわけ

て記述する。

2.2 神谷葡萄園の経営

神谷葡萄園は、牛久醸造場の南北に広がっており、形状は300～350m程の距離を置いて南東方向に平行して走る2本の道に囲まれた細長い土地で、醸造場南の道路から南端の道路までは約1.9kmもあった（図1）。大正9年当時で、赤・白葡萄酒用の数種類の葡萄樹が13万本ほど植えられていたという。園内には、醸造場から南北の葡萄園と牛久駅とを結ぶようにトロッコが敷設されており、総延長は4.8キロ（3哩）にも及んでいた。

神谷が実践した葡萄園の経営は極めて異色であった。葡萄園で働く労働者は、常勤の園丁とその見習いの園丁補、および農業期の臨時労働者に区分されており、園丁の採用条件は、なるべく牛久あるいは近郷に居住する身体強壯の者であり、かつ妻帯者で夫婦ともに葡萄園の作業に従事できることであった。葡萄栽培には豊富な知識と経験のある人間が必要であり、労働者を安定的・永続的に確保するための有効な条件であったといえる。

園丁は請負制度によって雇用されており、夫婦1組に対して3町歩の葡萄畑が割り当てられ、肥料や諸機械・材料は支給された。給料には年間の基本給と階級に応じた日給があり、規定の標準収穫量以上の収穫があった場合には、葡萄園が買い取るようになっていた。さらに園丁には資本金の10分の4までに相当する株が、持株として分け与えられ、株主としての経営参画が認められ、利益の配当を得ることができた。本来、個人経営で成り立っている農業を会社経営で行うには、このような労働への動機付けも必要であったと考えられる。さらに有能な労働者に対しては褒賞制度と奨学制度も設けられていた^{※10)}。

園丁の数について正確な数字を示す史料は見つかっていないが、明治45年4月5日の「輸出重要工産物調所」^{※11)}において「職工数（栽培、醸造技師職工園丁共）男式拾人、女十人」と記されており、園丁が夫婦一組で栽培を任されていたことから、園丁は10組20名前後であったものと推定される。残りはおそらく栽培ないし醸造に関わる技

表1 初代・神谷伝兵衛略歴

年月日	事項
安政3年2月11日	神谷伝兵衛生まれる
明治6年	横浜外国人居留地内フレッシェ商会で洋酒製造法を修得
明治13年4月	みかはや銘酒店（浅草区花川戸町四番地）を開業
明治14年	輸入葡萄酒を原料とした甘味葡萄酒の販売開始
明治15年	アルコールを原料として連成ブランデーの製造販売
明治16年	琉球産泡盛酒の販売開始
明治19年3月19日	蜂印香蜜葡萄酒の商標登録 『醸造雑誌』を創刊
明治26年	神谷酒造第二工場（本所区中ノ郷瓦町）設置
明治27年9月24日	神谷伝蔵（養嗣子）をフランスへ留学させる
明治28年	酒類醸造試験所（芝区三田豊岡町）設置 日本精製酒株式会社を創設
8月	日本石油精製株式会社を創設
明治29年1月	豊多摩郡東大久保村にフランス産葡萄苗6000本を植樹
明治30年4月	茨城県稲敷郡阿田村（現牛久市）の土地購入・開墾
10月	日本酒精製造株式会社を設立
明治32年	牛久醸造場竣工
明治34年3月	牛久醸造場竣工
明治36年9月	神谷酒造合資会社設立
11月1日	神谷バー（花川戸町）開業
明治45年4月10日	神谷酒造合資会社と大日本酒造株式会社を合併 株式会社神谷本店設置
大正9年2月14日	北海道酒精株式会社設立
大正10年2月	逝去

・坂本箕山『神谷傳兵衛』（日新印刷株式会社、1921）他より作成。

図1 シャトーカミヤ配置図

・左図は、旧牛久醸造場と旧神谷葡萄園の位置を示している。明治42年時点の葡萄畑およびトロッコ軌道は中川浩一編『産業遺産を歩く・北関東の産業考古学』（産業技術センター、p20、1978）による。

師や職工であり、表2の11-12名で推移している従業者数がこれに該当するのではないかと考えられる。『神谷傳兵衛』には「技師以下事務員の役宅（第一区役宅二十二坪、第二区役宅三十六坪、構内役宅三十坪合計八十八坪）に、園丁定住農舎馬舎を合せて十六棟あり」と記述されており^{※12)}、園丁の社宅がいくつか存在していたことが解るが、その数は少なかったものと推察される。

その後、神谷葡萄園は戦時中に荒廃し、戦後の農地改革により小作地として解放されたため、葡萄園の大規模経営は終止符を打たれることになった。現在は、敷地の多くが宅地として分譲されており、当時の面影はほとんど残されていない。

2.3 旧牛久醸造場の建設とその後の推移

牛久醸造場は明治34年3月に着工され、明治36年9月に竣工した。フランスのジロント州のセント・エシリヨン・イーペル氏の醸造場をモデルにしたとされ、建設費用は3万円余であったという^{※13)}。設計者は岡田時太郎（1859-1926）である。岡田は同郷の辰野金吾が設立した辰野建築事務所で日本銀行本店の建設に従事した後、1899年2月に岡田工務所を東京に設立し、1905年6月3日に満州に渡るまでさまざまな設計活動を行っており、代表作には三笠ホテル（国指定重要文化財）がある^{※14)}。

岡田時太郎自身が作成した「土木建築経歴書」^{※15)}の「工事設計監督」の項には、

神谷傳兵衛経営茨木（ママ）縣牛久葡萄園醸造場及事務室
一 煉瓦造三棟倉庫共約三百五十坪 [（ ）内筆者]
と記されている。この記述から岡田は煉瓦造の建物3棟（事務室（現シャトーカミヤ本館）、醸造場（現神谷伝兵衛記念館）、貯蔵庫（現キャノン [レストラン]）と倉庫の設計監督に携わっていたことが解る（図2）。

明治35年前後に撮影された写真1（南西側から撮影）には、すでに完成した醸造場（奥）と建設中の事務室（手前）が写されており、貯蔵庫が存在していないことから、①醸造場、②事務室、③貯蔵庫の順に建設されたことが解る。明治38年頃に撮影された写真2から事務室、貯蔵庫、醸造場がコの字形に建ち並び、貯蔵庫東側の中庭にあったボイラー室の高い煙突から煙が出ている様子が窺われる。また事務室と貯蔵庫の間に切り妻の倉庫が建設されていることが確認される。さらに明治44年に撮影された写真3から醸造場の西側部分が増築されていること、醸造場と貯蔵庫との入隅部分に越屋根の建物（煉瓦造平屋建て・現ワインセラー）が増設されていることが解る。

写真1 建設中の旧牛久醸造場（明治35年頃撮影）
・神谷伝兵衛記念館所蔵

写真2 旧牛久醸造場全景（明治38年頃撮影）
・神谷伝兵衛記念館所蔵

写真3 旧牛久醸造場全景（明治44年頃撮影）
・神谷伝兵衛記念館所蔵

大正10年に発行された『神谷傳兵衛』^{※16)}には、「園内の諸設備は、総て世界の葡萄園と称らるゝ、仏国ポルドウ府葡萄園の最新様式に則り、加ふるに多年の経験に依り、幾多の改善を施し、今や漸く完成の域に達した」とあるように竣工後も順次増改築が行われ、大正10年頃までに一様の施設が揃ったことが窺える。同書には醸造場の建物について以下の通り記述されている（表3参照）。

事務室及日本館（二階共二百〇九坪）【シャトーカミヤ本館】、貯蔵庫（百二十坪）【キャノン】、醱酵室（二階地下室共四百八十六坪）【神谷伝兵衛記念館】、洗滌場（四十五坪）、ボイロ室（八坪七合）、地下室苗木場（四十四坪）、堀置場（十二坪）、勝手場（三十九坪）、フランクホールブラック製造所（六坪）、加里製造所（三坪半）等何れも煉瓦造にて、合計九百六十三坪と技師以下事務員の役宅（第一区役宅二十二坪、第二区役宅三十六坪、構内役宅三十坪合計八十八坪）に、園丁定住農舎馬舎を合せて十六棟あり（【 】内は筆者が加筆）

『神谷傳兵衛』には、上記の施設に加えて私設測候所を設置し、葡萄樹の育成や醸造に関わる外気温を常時観測し、雹霜や風雨による災害の予防に充てたほか、葡萄の栽培や醸造に関する標本や書籍を備えた陳列室、図書室、研究室を設けていたことが記述されている。これらは栽培から醸造にいたる製造工程に先駆的に取り組むにあたって必要な施設であったといえよう。

牛久醸造場の葡萄酒は国内外で高い評価を受け^{※17)}、明治35年に50

表2 牛久醸造場の生産高

年度	製造量 (石)	金額 (円)	従業者数
明治37	180	10,800	-
明治38	150	9,750	-
明治39	170	11,084	-
明治40	170	11,084	-
明治41	150	9,750	-
明治42	173	11,134	-
大正4	184	25,336	12
大正5	182	21,640	12
大正6	153	21,420	11
大正7	158	22,910	11
大正8	95	17,100	11

・牛久市史編さん委員会編「牛久市史 近現代1」（牛久市、p563、平成13年）より引用。

表3 シャトーカミヤの建物別面積

『神谷傳兵衛』（大正10年）に掲載された建物			現存する建物
建物名称		建物面積	の面積
事務室	一階	689.7㎡（209坪）	283.8㎡
	二階		257.6㎡
	日本館		(139.4㎡)
醱酵室 （醸造場）	一階	1603.8㎡（486坪）	758.7㎡
	二階		452.7㎡
	地下		589.5㎡
貯蔵庫		396㎡（120坪）	474.5㎡
洗滌場		148.5㎡（45坪）	-
ボイロ室		28.71㎡（8坪7合）	-
地下室苗木場		145.2㎡（44坪）	-
堀置場		39.6㎡（12坪）	-
勝手場		128.7㎡（39坪）	-
フランクホールブラック製造所		19.8㎡（6坪）	-
加里製造所		11.5㎡（3坪半）	-
第一区役宅		72.6㎡（22坪）	-
第二区役宅		118.8㎡（36坪）	-
構内役宅		290.4㎡（88坪）	-

・坂本箕山『神谷傳兵衛』（日新印刷株式会社、1921）と平成19年3月の実測調査による。トーン部分は木造、それ以外はすべて煉瓦造。『神谷傳兵衛』記載のデータは1坪＝3.3平方メートルで換算。また実測調査の面積はすべて壁心寸法である。日本館は滅却済であるため（ ）内に示した。なお、醱酵室（醸造場）1階の現存建物面積は、西側増築部とワインセラーを含んだ数値である。

図2 本館・旧醸造場 (神谷伝兵衛記念館)・ワインセラー・旧貯蔵庫 (キャノン) 1階平面図 (1/400)

・「岡田時太郎経歴書」から岡田は辰野金吾のもとで設計活動に従事していた時期に設計技術を修得したといえるが (参考文献7))、辰野は岡田の建築家としてのキャリアに最も大きな影響を与えた日本銀行本店の設計をはじめとして壁心寸法を採用している事例が多いので、シャトーカミヤの設計にあたって岡田が壁心寸法を採用した可能性が高いと推測し、本稿では実測図については壁心寸法 (一部心寸法) で示している。以下図3～図8も同様。なお、滅却済みの日本館は日本大学藤谷研究室所蔵「日本建設株式会社実測・牛久シャトー1階平面図」 (1/100、昭和51年3月) による。

石にすぎなかった生産高は、順調に伸びて明治37年には180石に達した。だが、本格的な葡萄酒は日本人にとってまだ馴染みの薄いものであり、一般家庭に普及するのではなく医薬用としての需要がほとんどであった。したがってその生産高は明治・大正時代を通じて150-180石前後で推移しており、大規模に事業展開されることはなかった。

戦後、牛久醸造場は農地改革の余波を受けて規模を縮小し、昭和45年に貯蔵・生産を中止した。昭和44年以降、敷地内には葡萄酒販売所や各種レストランが順次建設されており^{※18)}、食のレジャー施設として活用されている。

3 シャトーカミヤの建築的特徴

3.1 シャトーカミヤの配置 (図1・写真4参照)

現在のシャトーカミヤの敷地は、南東辺約230mを正面とする変形ベース形で、常磐線牛久駅方面へと延びる道路に面している。旧牛久醸造場の建物群が残る一郭は、敷地の南東部に位置している。

敷地の前面道路から中央に設けられた正門を入ると、40mほどのアプローチ道路の先にシャトーカミヤ本館（旧事務室）が南面して建っている（写真8）。本館の北は四方を建物に囲まれた中庭となり、その中庭を挟んで70mほど先に旧醸造場（神谷伝兵衛記念館）が本館と向かい合って建てられている（写真9）。一方、旧醸造場の西端から折れ曲がって南に延びる建物は旧貯蔵庫（キャノン〔レストラン〕）である（写真10）。また旧醸造場と旧貯蔵庫との入隅に増設された煉瓦造の建物は現在ワインセラーとして利用されている（写真11）。以上の3棟は、一部で増改築がなされているもののいずれも旧牛久醸造場時代の煉瓦造（イギリス積）の建物である。建設に使用された煉瓦は牛久葡萄園内の土を用いて製造されたといい、近年まで敷地内には煉瓦製造用の窯が設けられていた^{※19)}。

なお、敷地内の東側にある店舗（スーベニアショップ）とチャペルは、近年になって建設されたものである。

以下では、旧牛久醸造場時代に建設された3棟の建築的特徴について個別に記述する。

3.2 シャトーカミヤ本館（旧事務室）（図2・3・4参照）

シャトーカミヤ本館は各部の構成や装飾からフランス・ルネッサンス様式といえる煉瓦造2階建の建物である。

屋根は銅板葺屋根（旧棧瓦葺）で、東西両端にマンサード屋根を載せ、屋根の各所に屋根窓を設けている。小屋組は、真束と斜め束で掬首を支える構造となっており、建設当初のままの状態を保っている。また当初から補強材として真束と下弦梁は金具で接合されている。

本館正面中央部は前面に少し突出させ、突出部1階中央は中庭に抜ける通路となっていて、その正面入口は両脇2本の円柱（トスカナ式）に支えられた半円形アーチで飾られている。なお、醸造場であった当時は、中央通路には線路が通り、南の葡萄園から葡萄を積んだトロッコが中央通路から中庭を抜けて醸造場まで運ばれていた。また2階窓にも2本の円柱（トスカナ式）を配し、中央柱間上に小さな半円形アーチを置いたパラディアン・モティーフとし、さらにペディメントを重ねて、正面を特別に装飾している。これらの部分は全て白漆喰塗りとし、1階半円形アーチには「CHATEAU

D.KAMIYA」の文字が記されている。2階ペディメントには蜂と葡萄の饅絵が描かれ、「蜂印葡萄酒」で世に知られるようになった神谷酒造の醸造場であったことを示している。中央突出部の東脇には、クリーム色漆喰塗の時計塔が、地上から2階屋根を越えて立ち上がっており、4面すべてにオープン・ペディメントとセットで時計が設置されている。時計盤の裏には「明治卅六年五月廿日 中村時蔵 上納」と記されており、本館が明治36年建築である事実を裏付けている。現在、時計盤部分はすべて白色に塗られているが、当初は一部茶系統の色で彩色されていた。

本館1階の東側部分は、襖や障子で仕切った畳敷きの2室とその前室、広縁、便所などの和風インテリアが組み込まれている（写真13）。床下の痕跡から、和室部分は近年に改造されていることが確認されるが、建築当初の室内空間については和室であったこと以外は不明である。また和室北側の階段回りにも改造された痕跡が多く見られ、後世の改造によるものと推定される。

一方、本館1階西側部分は、もともと事務室に利用されており、4本の円柱とカウンター台が当時の面影を残している。現在は間仕切りをして、小さな厨房をともなった喫茶室となっている。なお、西側に突出している便所部分は近年の増築である。

本館2階は、すべて洋風インテリアとなっており、大ホール、貴賓室とその前室、および貴賓室北の洋室、2つの階段からなる階段室、バルコニーなどで構成されている。大ホールには、南側壁面に1箇所、北側壁面に2箇所の暖炉が設けられており、飾り食器棚等の調度品も往時のまま設置されている（写真12）。一方、貴賓室にも東側壁面に飾り棚付の暖炉が設けられ、高級な調度品が配置される迎賓用の洋室である。なお、貴賓室北の洋室と階段部分には、1階と同様に改造が見られる。

かつて、本館2階では板垣退助などの賓客を迎えて度々ワインパーティーが催されたこともあり、その背景には政府高官を招聘し、交流を深めることによって葡萄酒の普及と酒税の改正を日論む神谷のねらいがあったと考えられる。つまりシャトーカミヤ本館は、事務室というよりも迎賓館としての性格が強い建物であり、そのことが建物の造形に示されているのである。

また、現在は取り壊されているが、本館東側部分の北側に日本館と称される和風の建物が設けられていたことが、写真4・7や壁面に残された屋根の痕跡から確認される。前掲「神谷傳兵衛」にも「事務室及日本館」と記述されており、大正10年には存在していたことが解る。日本館は140坪弱の和風建築であり、8畳、7.5畳、3畳、3畳の和室と食堂、浴室、玄関、受付、便所等で構成されていた（図2）。食堂からは本館東側の小階段を利用して貴賓室ないし大ホールに直接食事等の運搬がなされていた。また近年まで日本館の前には日本庭園が設けられており、本館だけでは事欠く「和」のもてなしに利用されていたと推察される。

3.3 旧醸造場（神谷伝兵衛記念館）（図2・5・6・7参照）

旧醸造場は、2階建、地下室付、銅板葺屋根（旧棧瓦葺）の横長の建物である。本館と同様に、正面中央1階にアーチを架けた大きな入口を設け、また、その上の2階にも大きなアーチを架けた開口部を設けて扉を立てている。本館中央通路を通り抜けた線路はこの入口まで達し、トロッコに積まれた葡萄はここから手動式小型起重機で2階に

写真8 シャトーカミヤ本館

写真9 旧醸造場（神谷伝兵衛記念館）

写真10 旧貯蔵庫（キャノン）

写真11 旧醸造場とワインセラー

図4 本館断面図 (1/400)

写真13 本館1階和室

図3 本館2階平面図 (1/400)

写真12 本館2階応接室

図6 旧醸造場2階平面図 (1/400)

図7 旧醸造場地下室平面図 (1/400)

図5 旧醸造場断面図 (1/400)

図8 旧貯蔵庫断面図 (1/400)

写真14 旧醸造場2階（明治36年）
・神谷伝兵衛記念館蔵

写真15 神谷伝兵衛記念館2階

写真16 神谷伝兵衛記念館1階

写真17 旧醸造場1階（明治40年頃撮影）
・神谷伝兵衛記念館蔵

写真18 神谷伝兵衛記念館地下室

写真19 旧貯蔵庫（キャノン）

運び上げられた（写真5）。2階開口部はパラディアン・モティーフとはなっていないが、煉瓦の柱型、アーチとその上のペディメントの構成は、本館正面中央の構成に通じている（写真10）。

旧醸造場の2階は、木造トラス小屋組（キングポストトラス）を見せた間仕切りのない一室の大空間となっている。トラス下弦材（陸梁）は大スパンを確保するためにすべて中央部で繋いで1本の梁にしておき、その接合部には金具が用いられている。またトラスの吊束には鉄製の丸棒が用いられており、力学に適った構造となっている。こうした小屋組は建設当初からであったことが写真14から解る。醸造場であった当時は、ここで葡萄が機械で搾られて果汁となり、階下に移されたときれる。床面には、輸送用レール敷の跡と果汁を階下に移す大小の落とし口が多数残っている。現在は、神谷酒造の歴史を伝える古写真や各種機械・道具、歴代の葡萄酒瓶、ラベルなどが展示される空間となっている^{※20}（写真15）。

1階は2階と同様に間仕切りのない長い一室の空間となっていて、大スパンとなる2階床梁は2本の柱と方杖で支える構造となっている。1階には大樽が立てた状態で並べられており、2階の落とし口から葡萄果汁を直接注ぎ込んで醗酵させるという合理的な生産工程となっていた（写真17）。1階西側の付属屋は明治44年までになされた早い段階の増築であり、既設部分と同じ煉瓦造・銅板葺屋根である。現在、この部分は室内を改造してワインのボトルリングに使用されている。

地下室は、梁間方向に密に通る厚い煉瓦壁で仕切られているが、各煉瓦壁の中央とその左右の3ヵ所はアーチのかかった開口部となっている。中央の開口部の通りは通路として用いられ、その左右には葡萄酒を詰める小樽が当時のまま横置きに並べられている（写真18）。

旧醸造場と旧貯蔵庫の入隅に増築されているワインセラーは、前述の通り、明治38-44年前後に建てられた煉瓦造の建物である。平屋建、銅板葺屋根（旧棧瓦葺）で、旧醸造場と棟を並行にする越屋根付の部分と、その東端部の南に突出した部分からなっている。旧醸造場とは別棟の建物となっているが、壁面を共有しており、階段を通して地下室でつながっていることから、完全には独立していない。内部は木造トラス小屋組を見せた間仕切りのない一室の空間で、現在はワインセラー兼ワイン販売所として使われている。

3.4 旧貯蔵庫（図2・8参照）

旧醸造場の西端から南の延びる旧貯蔵庫は、平屋建、銅板葺屋根（旧棧瓦葺）で、南妻を寄棟としている。昭和51年9月にレストランに転用するにあたって増改築が行われている（写真19）。

旧貯蔵庫の内部は、木造トラス小屋組を見せた空間で、現在は、間仕切りを設けて中央部を大空間の客室部とし、その北に厨房、南にエントランス・ホールと便所および応接室を設けている。またエントランス・ホールとなっている部分の東側外壁は、以前は木造（一部煉瓦造）であったことが写真6から確認できる。なお、その他の外壁が煉瓦造であったことは、現状と古写真から知ることができる。当初は、内部に強い光が入込まないように、東西の壁面に設けられた窓は小さな窓としていたが、レストランに転用するにあたって西側の丸窓の多くは出入口や大きな窓に改造されている（写真11参照）。また北側の西面は厨房の一部として増築されている。

4. おわりに

シャトーカミヤは食のレジャー施設への転用にあたっていくつかの増改築がなされているが、全体として旧牛久醸造場時代の主要建物3棟が状態よく保存されており、日本における葡萄酒醸造の導入過程を知る上で貴重な遺構であることが明らかとなった。最後にシャトーカミヤの文化的価値について検討しておきたい。

明治初期、新政府の殖産興業政策の一環として札幌開拓史の葡萄官園や播州葡萄園等において葡萄酒醸造が試みられたが、大きな成功をおさめることはなかった。その理由として日本の風土に適した葡萄樹の選定と栽培法に試行錯誤を繰り返していたこと、苗木植樹から葡萄果実の収穫および発酵・醸成・貯蔵に要する継続的な資金調達が困難であったこと、酸味と渋みの強い葡萄酒に対し当時の日本人は馴染みが薄かったことがあげられる。葡萄酒醸造の導入は容易ではなかった。

一方、山梨県の旧勝沼町では、土着の山葡萄や甲州葡萄を使用した葡萄酒製造が始められ、早くから生産に成功したことが知られている。しかし明治期の葡萄酒醸造の遺構として、山梨県近代化遺産総合調査で取り上げられているのは、（1）「葡萄酒資料館（旧・宮崎第二醸造所）」（明治37年〔メルシャン株式会社他所有〕）、（2）「宮光園（旧・宮崎光太郎氏住宅及び宮崎第一醸造所）」（明治・大正・昭和）、（3）「葡萄酒貯蔵庫（龍憲セラー）」（明治33年頃と推定）の3件にすぎない^{※21}。このうち（1）「葡萄酒資料館」は、日本酒醸造蔵と同様の木造・土蔵造の建築であり、（2）「宮光園」も煉瓦造の煙突と小さな石積地下貯蔵庫以外は、木造家屋と土蔵である。また（3）「葡萄酒貯蔵庫」は、地下に煉瓦造のワインセラーが設けられているが、規模は小さい。

シャトーカミヤの旧醸造施設は、建設当初から葡萄栽培にはじまり醸造、貯蔵、瓶詰出荷に至る一貫した製造工程を採用した本格的な葡萄酒醸造施設であり、在来型の酒造施設の延長線上、もしくは部分的に西洋技術を取入れた他の明治期の葡萄酒醸造施設とは全く異なっていたといえよう。シャトーカミヤは日本における葡萄酒の導入過程において、本場フランスの葡萄酒醸造技術を直接かつ一体的に移入した最初期の貴重な施設といえる。ヨーロッパの食文化の導入が、明治時代の日本が標榜した近代化の一つであるとするならば、シャトーカミヤは日本がたどった近代化を体現する文化的価値の高い近代化遺産としても位置づけることができるのである。

そしてさらに、シャトーカミヤでは旧牛久醸造場時代の3棟の建物も、内部や開口部の一部において改変が見られるものの必要最小限に止められており、建設当初の姿を良く伝えている。したがって産業遺産の再利用という点でも代表的な事例として評価される。

謝辞

シャトーカミヤ支配人蒲倉直己氏をはじめ、関係者の方々には実測調査の実施にあたってさまざまな配慮をしていただいた。茨城県教育庁文化課の藤田雅一氏には調査の遂行にあたって大変お世話になった。また図面の作成には筑波大学大学院生の助力を得た。藤谷陽悦先生（日本大学）、西澤泰彦先生（名古屋大学）には、資料の提供を受けただけでなく、さまざまなご教示をいただいた。ここに記して感謝

の意を表します。

なお、本稿は日本学術振興会・科学研究費補助金（特別研究員）の助成を受けたものである。

注

- 注1) 「シャトーは牛久にはじまる」（中川浩一編『産業遺跡を歩く-北関東の産業考古学-』[産業技術センター、pp.15-30、1978]）、鈴木光夫『神谷伝兵衛』（筑波書林、1986）等。
- 注2) 牛久市『牛久市史 近現代1』（牛久市史編さん委員会、2001）。
- 注3) 坂本箕山『神谷傳兵衛』（日新印刷株式会社、大正10年1月1日発行[大正9年12月29日印刷]）。
- 注4) 例えば、山口廣『近代建築再見-生き続ける街角の主役たち-』（上巻、大日本印刷株式会社、2002）、増田彰久『日本の近代化遺産1 関東編』（日本図書センター、2000）等。
- 注5) 岡田時太郎の経歴については、西澤泰彦「建築家岡田時太郎の中国東北地方進出について-20世紀前半の中国東北地方における日本人の建築組織に関する研究-」（『日本建築学会計画系論文集』[第452号、pp.187-196、1993.10]）に詳しいが、シャトーカミヤに関しては詳述されていない。
- 注6) 日統社編集部『神谷伝兵衛と近藤利兵衛』（日統社、1933）、前掲『牛久市史 近現代1』等を参照した。
- 注7) 斎藤英俊「葡萄栽培と葡萄酒醸造：神谷伝兵衛と牛久醸造場」、斎藤英俊・中野茂夫「シャトーカミヤ（牛久シャトー）旧醸造場施設」（茨城県教育委員会『茨城県の近代化遺産-茨城県近代化遺産（建築物等）総合調査報告書-』[茨城県、2007.3]）。
- 注8) 神谷伝兵衛の履歴や葡萄園の経営等に関する記述については、前掲「シャトーは牛久にはじまる」などにおいて紹介されてきているので歴史的事実については概略を記述するに止める。
- 注9) 神谷がこの土地を選択した理由として、葡萄栽培に適していたということのほかに、以下の2点を指摘し得る。第一は、明治29年に開業したばかりの日本鉄道会社土浦線（現JR常磐線）牛久駅に近接したところであり、その立地の良さも葡萄園経営の重要な要素であった点である。このことは、シャトーカミヤの敷地内に敷設されたトロッキの一端が牛久駅まで伸びていたという事実からも解る。第二は、神谷が購入したこの土地は、津田出が所有していた18ヶ所の大規模経営農場のうち最も広い700町歩を有する第7農場に属していたところであり、広大な土地を纏めて入手できたということが挙げられよう。
- 注10) 毎月、事務室では研究会が開催され、そこで出された意見や提案があれば、それを実践し、その結果が良好であれば、褒賞として株が配分された。また年少者で能力のある者には、学資を与えて就学の機会を作り、場合によっては、外国留学の道も設けていた。
- 注11) シャトーカミヤ所蔵「輸出重要工産物調書」（明治45年4月5日）。なお、ここでは前掲『牛久市史 近現代1』より引用。
- 注12) 前掲『神谷傳兵衛』（pp.53-54）。
- 注13) 前掲「シャトーは牛久にはじまる」。
- 注14) 三笠ホテルと牛久醸造場の建物の類似点について、前掲『近代建築再見-生き続ける街角の主役たち-』のなかで、山口廣は「煉瓦造と木造の違いはあるが、破風の扱い方、一階のみアーチ窓として腰蛇腹をめぐる手法など共通している」と指摘している。
- 注15) 「土木建築経歴書」（故岡田五十男氏提供「岡田時太郎旧蔵資料」所

収、藤森照信・西澤泰彦協力）。なお「土木建築経歴書」には、牛久醸造場の建築年代に関する記載がなく岡田が設計監理にどの程度関わっていたのかについては不明であるが、同史料には神谷伝兵衛が経営する酒精工場についても「北海道旭川酒精製造株式会社工場及事務室 一、倉庫六百五十坪、一、煙突一基、明治三十六年五月」と記されており、岡田が神谷の信頼を得て業務を請け負っていたことは確度が高いと考えられる。

注16) 前掲『神谷傳兵衛』（pp.53-54）。

注17) 1903年のイギリスにおける「万国衛生食料品博覧会」で名誉金牌、1904年のパリにおける「チュイルク博覧会」で金賞牌、明治39年の「東京勸業博覧会」で第一等金賞牌を受けるなど、品質についても内外で高い評価を得ていた。

注18) 昭和44年以降、敷地内ではガーデンバーベキュー（昭和44年）、富貴洞（昭和45年）、カミヤパウアー（昭和47年）、キャノン（昭和51年）、スーベニアショップ・コーザン（昭和52年）、プライグルサロン（平成9年）、アベユ（平成10年）、パン工房（平成11年）が建設（一部転用）された。

注19) 飯田茂次「牛久（うしく）シャトウ」（『日本醸造協会雑誌』68巻、1973.7）。

注20) 神谷伝兵衛記念館所蔵に展示されている古い醸造機械は以下の通りであり、このなかには神谷伝蔵が海外から持ち帰った機械も含まれている。キャップシール巻縮機、手動式小型起重機（以上、ペバン・フィス・エーネ社[ポルドー]）、ワイン輸送ポンプ（ペバン二世会社製[ポルドー]）、ロ金付機、止め金外し機、コルク栓外し機、リキュール補充機、回転式沈静機（以上、マチュー社製[ランス]）、びん詰め機（ボレット・フォーゲル社製[ハンブルグ]）、コルク打栓機（ルメル社製[ランス]）、発酵槽、びん回転架台、压榨機、除梗機、搾り機、破碎除梗機、濾過機、貯蔵樽、コルク打機。

注21) 山梨県教育委員会学術文化課編『山梨県の近代化遺産-山梨県近代化遺産総合調査報告書-』（山梨県教育委員会、1997.3）。

参考文献

- 茨城県教育委員会『茨城県の近代化遺産-茨城県近代化遺産（建築物等）総合調査報告書-』（茨城県、2007.3）。
- 牛久市『牛久市史 近現代1』（牛久市史編さん委員会、2001）。
- 坂本箕山『神谷傳兵衛』（日新印刷株式会社、大正10年1月1日発行[大正9年12月29日印刷]）。
- 鈴木光夫『神谷伝兵衛』（筑波書林、1986）。
- 日統社編集部『神谷伝兵衛と近藤利兵衛』（日統社、1933）。
- 「シャトーは牛久にはじまる」（中川浩一編『産業遺跡を歩く-北関東の産業考古学-』[産業技術センター、pp.15-30、1978]）。
- 西澤泰彦「建築家岡田時太郎の中国東北地方進出について-20世紀前半の中国東北地方における日本人の建築組織に関する研究-」（『日本建築学会計画系論文集』[第452号、pp.187-196、1993.10]）。

（2007年11月19日原稿受理、2008年4月15日採用決定）